

お受験狂騒曲の
実態はこれだ

「壁に勧誘の成績グラフを張り出す」「1人紹介すると図書券500円プレゼント」

大手進学塾が小学生を「営業マン」に仕立て上げている!

全内書 「プリンセス・マサコ」発禁騒動の一部始終

独占 米倉涼子&菊地凛子

激白 王貞治「今年の僕はワガママになる」

週刊ポスト

2007 MAR.

3.9

330yen

労働者斬り捨て
の「戦犯」たち

過労死は自己管理の問題と 奥谷禮子の品性

経団連会長企業「キヤノン」の請負従業員が涙の訴え

労働審判科全委員にして人材派遣
会社「サテール」代表—その正体は?
放言

起立しないのはこの5人だ!

安倍政権「閣議崩壊」を 誌上実況中継する

- ◆小泉前首相と中川幹事長の「ホットライン」
- ◆「ポルノ小説」どころじゃない「隠れ議員特権」

●出演者の個人情報と一緒に流出
「NHKスペシャル」の
「5股交際」「職場乱倫」日記

●凶悪事件を追跡
埋められた銀座美人ホステス
「犯人2人との乱れた同棲生活」

株急騰!これが注目の「業界再編」銘柄だ
次の「サッポロ」「松坂屋」はどこだ?



「日本の天皇家ほど神話と謎に包まれた主題はない」という一節から始まり、雅子妃の苦悩を描いた過激な内容から物議を醸した「プリンセス・マサコ」。その邦訳本は、3月中旬発売を目前に、なぜ刊行を中止するに至ったのか。全内幕をリポートする。

「事実無根の侮蔑的な記述」

「読者が自分で読み、自分で判断すべきだ。なのに、日本政府はその基本的な権利を奪った。北朝鮮やミャンマーならともかく、こんな検閲が先進国であってはならない」

本誌の取材に対し、強い調子で日本政府を非難する



<全内幕>

たわけではなかった。ほかから『週刊朝日』の「おわび騒動」で本の過激な内容に対する世間の関心が高まり、宮内庁が邦訳本に神経をとがらせることになったとの見方がある。

東宮職ではなく 侍従長による抗議

第2幕が上がったのは、出版が近づいた今年2月。1日に宮内庁がヒルズ氏に、6日に外務省がヒルズ氏と

出版社ランダムハウス・オーストラリアに、それぞれ抗議文を送ったのである。中でも、駐オーストラリア日本大使の名で出された外務省の抗議文は激烈だ。「プリンセス・マサコ」が、噂や報道、関係者と称する人物のコメント等は無責任な形で引用した信頼性のないものだ」と断定。天皇皇后両陛下始め皇室の方々のお姿や言動について、事実無根の極めて侮蔑的な記述がなされ、愛子内親王殿下の御誕生や皇太子妃殿下の御体調に關しても非礼な内容が記載され、などと、記されている。

さらにヒルズ氏がそうした記述をした背景については、「対日蔑視が存在する」と指摘しているのだ。

そして、「我が国政府としては、これを断じて看過することはできない」として、「謝罪」と「適切な措置」を要求する。抗議はそれに終わらず、最後に「本文書の内容について、日本の当該出版社に対し速やかに伝えるべきことを要求す

賞したこともあるジャーナリストだ。同書は昨年11月にオーストラリアで出版され、話題を呼んでいる。原書を読んだ宮内記者が語る。

「雅子妃の病氣は公表されている適応障害ではなく、重度の鬱

『週刊朝日』おわびの次は「邦訳本刊行中止」...

『プリンセス・マサコ』発禁騒動の

一部始終

病。愛子さまは体外受精で誕生した。雅子妃の健康回復のために宮内庁が皇太子ご夫妻の離婚を検討していた。など、衝撃的な内容になっていきます」

その邦訳本が、今年3月中旬に講談社から出版される予定だったが、出版を間近に控えた2月16日、講談社から突然、出版中止が発

る」と結んでいる。

一方、宮内庁の抗議文は、渡辺允侍従長の名で出されている。だが、不可解なのは、それまで問題としてきた雅子妃に対する記述に一切触れていないことだ。

「貴著「雅子妃―菊の玉座の囚人」について、この書簡を送ります」と始まる一文は、「政府は、この本の描いている皇室像が如何に歪んだものであるかに驚き、対応ぶりを検討しています。その間、ここでは、天皇皇后両陛下の側近にお仕えして

いる立場から、両陛下に直接関わり、しかも明らかに事実と異なる一つの箇所に絞って、問題を提起します」と続けられている。

皇室ジャーナリストの崎敏弥氏が解説する。「雅子妃に関する本なのに、東宮職ではなく、両陛下の側近中の側近である侍従長の名で出ている。これは、両陛下のお気持ちを考えての抗議文だと考えることもできます」

確かに、抗議文では両陛下がハンセン病の問題などに深く関わってきた歴史を強く示している。これは、ヒルズ氏が「日本の皇室がハンセン病のように議論を呼ぶ事柄に関わりを持つことはあり得ない」と断定したことへの反論だ。

こうした抗議内容がヒル

表された。だからこそ、ヒルズ氏は冒頭のように怒りを露にしたのである。

そもそも「プリンセス・マサコ」は、出版前から波紋を投じていた。昨年夏から写真週刊誌が内容の一部を紹介。出版直後には「週刊朝日」が06年11月17日号から2号連続で大々的に取り上げ、「雅子さまと皇太子殿下が考えていた皇籍離脱の『真相』」と、刺激的なタイトルを打った。

ところが、原書にはそこまでの記述はなく、宮内庁東宮職が「見出しは事実無根」と抗議。野村一成東宮大夫も会見で、「週末にかけて本を読んだが、本が事実無根なのはもちろん、『週刊朝日』が本に書いてもいないことをタイトルにするとは問題だ」と批判した。

結局、「週刊朝日」は宮内庁の要求に対し、「見出し等で読者に誤解を与えかねない部分もあったため、その点について、率直におわびいたします」と「おわび」を掲載した(12月22日号)。

が、騒動は完全に収拾し



原題は『Princess Masako - Prisoner of the Chrysanthemum Throne』(右は著者ベン・ヒルズ氏)

渦中の著者ベン・ヒルズ氏は、「宮内庁こそ雅子妃に上下座して謝罪すべきだ」と怒りの反論